

アムールの風

（正統右翼の論理）

・第8回
田中健之
（黒龍會会長）

えたのです。

日韓合邦、つまり日韓両国が対等に連邦を築こうという根底にあるものは、大西郷の精神に連なるものです。

そもそも西郷隆盛の『征韓論』というのは誤りで、『遣韓論』というのが正解です。西郷は自ら使節として朝鮮に渡り、李氏朝鮮の王国の父君であり、時の朝鮮の政治を主る、大院君と会見して、朝鮮の開国と近代化を促そうとしました。

そのために西郷隆盛は、大院君と親しく交流していた、旧幕臣の勝海舟を通して、大院君側に会談の根回しをしており、勝の紹介状を持って、大院君と会う際に西郷は、烏帽子直垂の正装で、非武装にて朝鮮に赴くことを主張していました。

第二章 知られざる日本裏面史

（日韓併合から敗戦まで）

○すり替えられた日韓合邦 ——征韓論者ではなかった西郷隆盛——

明治四三（一九一〇）年八月二十九日、「日韓併合に関する条約」によって、大韓帝国は世界地図から消滅し、日本の一部となりました。日韓併合は本来、日韓両国が、今日のEUのような、緩やかな連邦を築くことを理想とした、日韓両国の愛国志士たちによって行われた、日韓合邦運動を日本政府が利用し、合邦を併合にすり替

西郷隆盛の没後十三年を経た、明治二十三（一八九〇）年になるまで、西郷隆盛を征韓論者だとする政府の見解に対して、誰も異論を唱えることはできませんでした。その征韓論者とされた西郷像に対して、最初に異論を唱えたのが勝海舟でした。

彼は、『追賛一話』を刊行し、次のように西郷は征韓論者ではないと説いたのです。

「世、君を以て征韓論の張本人となし、十年の乱を以て征韓論の相背馳したるに源由すとなす。是れ未だ公の心を識らざる者なり。夫れ君が征韓論の張本人たるの大誤なるを明かにするを得ば、之より端摩盲測せる臆断の誤謬たるは、刀を下さずして自ら解すべし。予、明治八年十月君が篠原国幹に贈られし書簡を蔵す。之れを一読せば、其疑を霽すに足る」

勝海舟が言う書簡とは、次のものです。

この書簡には珍しく、時候の挨拶がなく、次の様な書き出しで始まります。

「朝鮮の儀は数百年來交際の国にて、御一新已來其の間に葛藤を生じ、既五六ヶ年談判に及び、今日其の結局に立至り候処、全く交際無之人事尽く難き国と同様の戦

端を開き候儀、誠に遺憾千万に御座候」

と記されており、

「たとえこの戦争を開くにもせよ、最初測量の儀を相断り、彼方承諾の上発砲に及び候えば、我国へ敵する者と見做し申すべく候えども、左もこれなく候えども、左もむなく候て発砲に及び候とも、一往は談判致し、何等の趣意にてかくの如き時期に至候か是非相糺すべき事に御座候」

と述べ、

「一向彼を蔑視し、発砲いたし候故応砲に及び候と申すものにては、これ迄の友誼上、実に天理に於いて可恥の所為に御座候」

と結ばれています。

この書簡を現代文に訳すと、次のようになります。

「朝鮮とは数百年來交際して来た国で、明治維新以來、葛藤を生じながらも、すでに五、六年間も談判を続けて、今日では最終的な段階となつていて、全く人の交際が出来ないような国と同様に戦を仕掛けるとは、誠に遺憾千万です。

たとえこの戦争を行うにしても、最初に測量をしたい

事を断った上で、相手の承諾を得たにもかかわらず、発砲をして来た場合には、我国に対して敵対するものとして見なすことが出来ませんが、そうでなくて発砲されたとしたならば、一応は談判して、どういう意図で発砲に至ったのかという経緯と意味を問い質すべきです。まったく朝鮮を蔑視して、発砲されたから応戦したと言うのであれば、これまでの外交上、実にすべての道理において恥ずべきことです」

明治八（一八七五）年九月二〇日に生じた江華島事件の際、朝鮮に砲艦外交を行った日本政府に対して、西郷隆盛は烈火のごとく怒り、批判します。それが、この篠原国幹に宛てた書簡です。

勝海舟は、事ある毎に「西郷は征韓論者ではないよ」と繰り返し語っていました。

彼は、「西郷はけっして征韓論者ではないんだよ、俺はそのことを当人から聞いて知っているんだよ」と、「岡鉄舟口述、勝海舟評論、安倍正人編纂」の『武士道』という本の中で、編纂者の安倍に対して勝が語っています。

日清戦争当時、一部の論壇界において、「日清戦争は西郷隆盛の征韓論を受け継ぐもの」だという論議に対し

彼は明治二八（一八九五）年、ロシアのウラジオストクに渡り、柔道場を経営しながらロシアの事情を調査、研究しており、明治三〇（一九一七）年七月にウラジオストクを出発、単身シベリアを横断の壮途に就きました。

首都のサンクトペテルブルグを経て、無事ウラジオストクに帰着したのは、翌年六月です。

彼がロシアで観たものは、帝政ロシアに革命が生じる可能性でした。その時、ロシアは国内の不満を国外に逸し、革命の危機を回避するために行う、対外侵略が「危ない」ということの実感でした。それは朝鮮半島が、ロシアによって奪われる危険性が極めて高いことを意味していました。

朝鮮半島は、ちょうど日本の首筋に突き付けられた匕首のように位置しており、韓国がロシアの植民地になった場合には、日本はいつでもロシアの侵略の危機に直接晒されるため、韓国の独立は日本の安全保障上、極めて重要なことでした。

そこで、日本と韓国とが連邦を作ることによって、アジアの共同防衛を図り、ロシアの侵略を防ぐ必要があると、内田は考えるようになりました。

て、勝海舟は「朝鮮を征伐して、西郷の志を継ぐなどと云うことが何処にあるユ」と述べ、徒に戦争を煽っていた日本政府を批判しています。

朝鮮に対して砲艦外交をやったのは、大久保利通や岩倉具視らであり、彼らは西郷隆盛を征韓論者だとして批判し、戦争を煽る危険人物だという理由をつけて、政府から追いやった親欧米派の人々です。

彼らは、日本がペリーに脅された時と同様なことを、今度は朝鮮に対してやったわけです。

——韓国問題の背後にロシアあり——

韓国（一八九七）明治三〇年、朝鮮の国号が大韓帝国へと改められた問題の背景に大きく横たわっていたのが、ロシアでした。当時、中国や韓国の問題をやる人たちが結構いましたが、ロシア問題をやる人はほとんどいませんでした。現在でもロシア問題をやる人は少数派です。

そこで、自らロシア問題に従事することを決心したのが、後に黒龍會を創立する玄洋社の青年、内田良平でした。

また、内田の韓国側の同志は、李容九という人です。

内田と李との偶然の出会いを機会に、日韓合邦の運動が起きました。

李容九という人は、東学党の乱に参加した人で、東学党の二代目教祖の崔時亨の弟子です。同じ兄弟弟子には孫秉熙がいます。二人とも東学党の乱が鎮圧され、身の危険を感じて朝鮮を脱出して、日本に亡命します。

亡命中の李容九は明治維新に学び、朝鮮の近代化の道を探った結果、朝鮮が日本と連邦を築くことによって、朝鮮の民衆救済、近代化路線を考えたのです。

李容九は、同志の宋秉峻とともに、「一進会」という政治団体を組織して、親日の旗幟を鮮明にします。

彼らは日露戦争の時に、一〇〇万人の一進会の会員を率いて、日本軍のために経費はすべて手弁当で、鉄道敷設工事を行ったり軍事物資の運搬をしたりしていました。

——朝鮮に心血を注いだ福沢諭吉——

明治二六（一八九三年）、樽井藤吉という人が、日本をはじめ朝鮮、清国の人々でも読めるようにと、漢文で『大

東合邦論」という本を書きました。

李容九はその本に記されている、日本と朝鮮との連邦建設から日韓合邦のヒントを得ました。

当時の朝鮮には、大きな流れが二つありました。

その一つは事大党で、もう一つは独立党です。

事大党は閔妃びんひに代表され、清国とかロシアに朝鮮を委任ゆだねる考え方です。

それに対して、金玉均きんぎょくぐんや朴泳孝ぼくえいこうに代表される独立党は、開化党とも呼ばれていますが、彼らは日本の明治維新に学んで、朝鮮の近代化と清国からの独立を図ろうとしたグループです。彼らは、朝鮮が清国から独立するため、一八八四(明治一七)年に独立党はクーデター(甲申事変)を起こしますが、結局は事大党に潰されてしまい、金玉均や朴泳孝らは日本に亡命します。この時、彼らの亡命生活を支えたのが、朝鮮の近代化と独立を援助していた福沢諭吉と頭山満ら玄洋社の人々でした。ところが、日本政府は金玉均らの亡命を迷惑がり、彼の身柄を北海道や小笠原諸島に流してしまいます。

こうした長年、日本政府から流刑人同様の扱いを受け、虐げられていた金玉均は、過酷な亡命生活に疲れ果て三〇日に発行された朝鮮最初の新聞、『漢城旬報』は、漢文を「真書」とする保守勢力との妥協によって、同紙は漢文を使用したため、福沢が作った諺文活字は使用されることはありませんでした。

しかし、『漢城旬報』が翌年一二月に廃刊され、その後継紙として、一八八六(明治一九)年一月に創刊された週刊の新聞『漢城週報』が発行されると、それには諺文が採用され、福沢が作った諺文活字が使用されました。ちなみに同紙は、朝鮮で最初に諺文を用いた新聞となりました。

福沢諭吉が唱えた「脱亜入欧」とは、朝鮮近代化と独立に尽力した金玉均を殺した、頑迷な事大党に対する、彼の警告だったのです。

――合邦を併合にすり替えた藩閥政府――

明治三八(一九〇五)年、日露戦争が終結すると、日本政府は、「日露戦争の直接的な原因は韓国政府だ」として、韓国の外交権を日本が接收して、韓国は日本の保護国となりました。

た結果、事大党の中心人物である閔氏によって上海に誘き出され、閔氏が放った刺客の洪鍾宇ほんじゆんぐの手で暗殺されました。その遺骸は、清国の軍艦で上海から朝鮮に運ばれ、バラバラにされた上で、朝鮮全土で晒されます。

この時に頭山満らは、「畏だから上海には行かないように」と説得しますが、金玉均は、「虎穴に入らずんば虎児をえず」と言って寂しそうに笑っていたそうです。

金玉均の亡命を長年支援し、庇護ひごし続けてきた福沢諭吉は、金玉均の暗殺によって、朝鮮に対して大きな失望感を抱き、それを機会に彼は、「脱亜入欧」ということを唱えます。実は福沢諭吉ほど朝鮮に対して心血を注いだ人はいません。

朝鮮の改革による近代化を支援していた福沢諭吉は、朝鮮の独立と啓蒙のために、日本への留学と新聞の発刊を独立派の指導者である朴泳孝に提案したことから、朝鮮最初の日刊紙が発刊され、徐載弼じょさいびつら数十名も慶應義塾と士官学校へ留学することになりました。

新聞に諺文(ハングル)の使用を望んでいた福沢は、自ら平野富二の築地活版所に諺文活字を注文して、新聞刊行の準備をしていましたが、一八八三(明治一六)年十月

そうした流れの中から、韓国の人民が日本国民と平等の権利を享受するためだとして、日韓合邦運動が生じました。この運動の中心が、前述した、日本側では黒龍會の内田良平、韓国側では東学党の流れを汲む政治団体、一進会の会長である李容九でした。

彼らは、日本と韓国の合邦で成立した新国家を大東国だいとうこくと名づけて、EUのような緩やかな連邦国家を建設し、日韓合邦が成立した後には、満洲にまでも包括した連邦国家れんぽうこくを建国しようと計画していたのです。

鳳の国ほうのくにという名前の由来は、日本と韓国、それに満洲を合わせた地図の形が、鳳凰が翼を拡げた姿に似ているからです。

首都は、満鮮国境地帯に位置する白頭山の北山麓の山間盆地に位置する街、間島かんとうにすることにしました。何故なぜならば鳳凰の心臓部に位置する場所が丁度、間島で、そこは朝鮮民族の聖地である白頭山に近いことなどから、鳳の国の首都にするには相応あつたふさわしい場所であったのです。

鳳の国を建国するために、一進会は財団を設立し、先遣隊として、武装農民である屯田兵とんでんへいを組織して、間島に入植させました。ですが、日本の政府は、日韓の連邦を

欲せず、日韓併合による朝鮮の日本化を企てていました。それは、欧米流の植民地化と異なり、韓国を日本の一部に組み入れる一方、韓国という国号は、清国の属国時代の朝鮮に戻して、そのすべてを完全に日本の版図にすることで、世界地図上から大韓帝国を消し去ったのです。

ところで、日韓合邦による連邦制の下では、韓国の文化、伝統を尊重した上で、政治、外交、軍事、経済に限定した連邦制、つまり政合邦主張していました。

日韓合邦運動に取り組んできた一進会の人たちは、合邦が併合にすり替えられたことで、自分たちが日本政府によって利用され、欺かれた、として一気に反日になりました。

売国奴とされた李容九は、日本に亡命しますが、国を奪われてしまったという心労から病を得て、神戸の須磨で悲痛なうちに客死します。

日露戦争において一進会が、手弁当で鉄道建設をしたり、軍事物資を運搬したりした恩功が日本に対してあつたにもかかわらず、日本政府は一進会に対し、他の反日団体と同様の扱いをして、強制的に解散させました。

そのため一進会の人々は、李容九とは同じ東学党の崔

天道教の影響が根強く、朝鮮労働党政権の中枢や朝鮮人民軍の幹部、そして一般の北朝鮮国民の中にもかなり、天道教の信者かその関係者がいると思われれます。

そのことは、一進会が間島に送り込んだ屯田兵が、白頭山を拠点に、日本からの独立を求めて戦い続けた、抗日パルチザンの存在が大きかったことを物語っています。

朝鮮民族独立運動の正統は、東学党の系譜を引く、一進会の屯田兵による抗日パルチザンにあり、中国共産党が指導する東北抗日聯軍ではありません。

孫秉熙は、大正八（一九一九）年に「韓国独立宣言」を発表し、李容九が率いた会員百万人とも言われていた一進会系の人々も吸収して、三・一独立運動の指導をし、朝鮮独立運動を激しく展開します。上海の大韓民国臨時政府を指導した金九も東学党の出身です。朝鮮独立運動は、ほとんど東学党の人たちが中心となって行われており、第二次東学党の乱のような形で独立運動が起きています。

日韓併合を行った日本政府は、親日派の一進会を目標りなものだとして、他の抗日団体と同様に解散を命じました。

時亨の兄弟弟子だった、朝鮮独立家である孫秉熙の下に流れて行きました。

間島に入植した一進会の武装農民たちは、そのまま抗日パルチザンを組織して、武装闘争による朝鮮独立を目指しました。

今日、北朝鮮の金日成伝説は、一進会の屯田兵による抗日パルチザン活動の中から生まれました。

戦後、朝鮮半島の北緯三十八度線以北を占領したソ連軍は、抗日パルチザンの英雄だった金日成の名を借り、ソ連軍の特務大尉である朝鮮系ソ連人の金成柱に金日成と名乗らせて、朝鮮半島の北半分を統治させました。それが今日の金王朝の始まりです

東学党の教会としては、李容九は侍天教、孫秉熙は天道教と名乗っていました。

前述したように、李容九も孫秉熙も東学党では崔時亨の兄弟弟子であったことから、侍天教も天道教も経典、教義などの内容は全く同じで、その違いは唯一、侍天教が親日であり、天道教が抗日であったのみでした。

今日の北朝鮮では、朝鮮労働党以外に天道青友党という天道教系の政党が存在しています。北朝鮮では今でも、

日本政府にとって日韓合邦を唱える一進会は、日韓併合という日本政府が行うプログラムを乱す迷惑な存在以外になかったからです。

この時に日本政府が一進会に出した解散費用は、十五万円で、それを百万人の会員に分けるとわずか一人当たり十五銭にしか過ぎませんでした。

日韓合邦を日韓併合にすり替えた、長州閥の重鎮桂太郎首相（当時）は、もはや無用の長物となった一進会をわずか十五万円で解散させたとして、周囲に豪語していたのですが、後に生じた朝鮮独立運動の鎮圧に躍り上がった日本政府は、日本国民の血税をその何百倍、何千倍も注ぎ込んだことでしょうか？

そして今日の日韓関係で、日本が韓国に支払い続けている巨額な金も、本を正せば、日韓併合に対する代償であるという事を我々は認識しなくてはなりません。



田中 健之 たなか たけゆき

歴史作家・維新運動家。昭和38年11月5日生まれ。福岡市出身。玄洋社初代社長玄田浩太郎の曾孫で、黒龍会を創立した内田良平の血脈を継承する親族。拓殖大学日本文化研究所近現代研究センター委員研究員を経て、現在、ロシア科学アカデミー東洋学研究所及モスクワ市立教育大学外国語学部客員研究員、日露善隣協会会長。2008年に黒龍会を再興し会長に就任。主な著書に「満洲に祀られる人々」、「昭和維新」、「北朝鮮の終焉」、「実は日本人が大好きなロシア人」(横浜中華街)など。中央公論「正論」一歴史群像」などの論議誌に多数執筆。